後藤 郁子 著
『小学校初任教師の成長・発達を支える新しい育成論』

山住　勝広（関西大学）

本書は、後藤郁子氏が、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科に提出した博士学位論文にもとづき刊行されたものである。本書の目的は、ユーリア・エンゲストロームの「拡張的学習」の理論を用いて、小学校初任教師の成長・発達をいかに支えるかという問題を対象に、「初任教師の学びを、従来の教授型・プログラム型の学びから、初任教師自らが自らの実践を分析し解決方法や方向性を見出し成長・発達を遂げていく協働学習」へと転換するような「新しい育成論」を構築するところにある（p. 1）。そのため、本書は、理論的・方法論的アプローチと経験的・実証的アプローチの間を相互に連結し、往還することを一貫して進めるものとなっている。そして、そのことによって本書は、教師教育の研究と実践における旧来の限界を拡張的に超え、新たな地平を創出していく、きわめて独創的で高い意義をもった成果を、生み出しえているといえるのである。

また、本書における初任教師への焦点化も、理論的であると同時に実践的であるという二重の意味で、非常に重要な問題設定となっている。つまり、第1に、理論的には、大学から学校現場への移行にともない必至となる危機的状況において、初任教師はいかに成長・発達を遂げることができるのかを明らかにするという挑戦的な課題がある。ここでの初任教師の育成論は、後藤氏が「エンゲストロームの言う内的矛盾の意味を、より心情的、主観的に捉える言葉」としてあげている、初任教師たち自身の「葛藤」（p. 53）を起点に、そこからスタートするものとなる。いいかえれば、ここでは、主体的・情動的に生じる危機的な葛藤を、主体自身が生き抜くことを促進・支援する育成論が、拡張的学習の理論を発展させながら求められることになるのである。

本書では、教師になっていく移行段階が、後藤氏の表現では「初任教師の成長・発達の萌芽期」（p. 2）としての「養成期の大学生」の段階も含めて幅広くとらえられている。したがって、本書は、第2に、実践面でいっても、研修機関としての教育委員会や仕事の現場としての学校にとどまらず、養成機関としての大学をも射程に収め、具体的な介入研究を通して、境界横断的で拡張的な初任教師育成を新たに提起するという重要性をもつものとなっている。評者も、大学の小学校教師養成コースに勤務する者のひとりとして、本書が描き出す初任教師育成論に、現実的かつ実際的な関心を強く寄せるとともに、多大な刺激を受けることとなった。

こうして、本書では、第1章「研究の背景」と第2章「研究の目的と理論的枠組み」を通して、文化・歴史的活動理論を基盤にしたエンゲストロームの拡張的学習の理論と「形成的介入研究」の方法論に立脚して、小学校初任教師の新しい育成論へアプローチするための強固な理論的・方法論的フレームワークが、教師教育の分野における先行研究の広範なレビューと結びつけられながら構築されている。また、第3章「本研究における調査及び分析方法の概要」では、本書における研究の目的と課題を追求するための具体的な研究方法が明らかにされている。その後、本書では、理論的・方法論的フレームワークと個別の研究方法にもとづきつつ実施された四つの経験的・実証的研究の結果にかかわって、第4、5、6、7章のそれぞれで収集されたデータの分析が行われている。それは、次のようなシリーズのものである（p. 42，p. 233）。

研究1：初任教師の眼前で起きている問題・課題（初任教師のニーズ）とその問題・課題を乗り越える契機と学習サイクル（成長・発達の契機と学習サイクル）→第4章
研究2：初任教師の成長・発達の契機を阻む要因（課題としての資質・能力）→第5章
研究3：初任者研修としての学校組織内での協働学習のデザイン及び介入（組織内モデル）と初任・若手教師支援としての学校組織外での協働学習のデザイン及び介入（組織外モデル）→第6章
研究4：初任教師の成長・発達の萌芽期としてのインターンシップ（萌芽期の探究的学習）→第7章

このように、教師教育研究における本書の非常に優れた独創性は、何よりも、エンゲストロームが提唱してきた形成的介入研究の方法論を、現実の諸条件のもとに置かれた小学校初任教師の支援と育成の問題解決に首尾一貫して応用している点にあるだろう。その前提には、長年、東京都公立小学校教諭を務め、管理職も経験された後藤氏であればこそ可能であるようなインサイダーとしての視点が大きく関与しているように思われる。

本書は、とくに第5章「主体的な成長・発達を阻む要因」（上述の研究2）に如実に現れているように、外部からのトップダウンの統制ではなく、学校現場の内部にこそ足場を置き、あくまでも実践活動の内側からボトムアップに初任教師の育成にアプローチしようとする視点を強固に堅持している。それは、客観性の名のもと、第三者的な参与観察と分析を行うものでも、実践の優劣について評価・裁定する権限と権力を背景に進められる研究でもない。むしろ、初任教師が教師になっていくためのアイデンティティをめぐる苦悩に深く共感し、日々の危機的葛藤を教師として切り抜け、生き抜いていくための苦闘に親密に寄り添おうとする介入研究者としての姿が本書の基調をなしている。評者自身、後藤氏が2年にわたり学校現場で行った調査研究にもとづき第5章で叙述している迫真のエスノグラフィーを読んで、そこに登場する初任教師たちが紡ぎ出す生成の苦しみともいえる「物語」に、自らのゼミを卒業した若い小学校教師たちの日々が自然と想われてきて、心を揺さぶられることとなった。

繰り返せば、本書において後藤氏は、終始、形成的介入研究の方法論的立場を明確にしながら、初任教師の成長・発達の過程を、「問題や課題に行き詰まった状態の中で葛藤しながら自らの意志と力で解決の方向や方法を見出し、乗り越えようとする過程」（p. 55）、ととらえていく。そして、そのような主体的な乗り越えを支える協働学習の場を、初任教師とその指導教師や管理職の間で創り出し、そのあり方を実践的に探究することを、具体的な介入研究として進めている。つまり、本書が推進する初任教師の育成論は、何よりもその基本的な信念として、初任教師自身の「主体的発達」（p. 47）の契機と萌芽に注目し、彼や彼女たちの教師としての自律的かつ個性的な成長・発達の可能性に全面的な信頼を寄せるものなのである。

たとえば、後藤氏は、現行の初任者研修システムが初任教師の主体的な成長・発達を著しく阻み、それどころか「無責任」や「無能」といった自己否定的な意識へと追い込むケースをデータの分析から具体的に明らかにした上で、それを痛烈に批判している（第5章）。そのさい、後藤氏は、代替策として、養成期・移行期にある初任・若手教師にまずもって「子ども・子どもたちを理解する力」「子ども（たち）とのインタラクション力」（p. 138）を促進する育成のシステムが学校に必要であることを事例研究に即して対置するのである。

こうして本書では、第6章（前述の研究3）において、初任教師自身が「同僚との語り合いを通し、自分が直面する問題・課題を把握し、問題解決への方向性を見出していく発達のプロセス」（p. 139）を創出するために、初任教師、先輩中堅教師、介入研究者の間での協働学習を促進する介入研究の成果が分析・検討されている。そこでは、初任教師が先輩教師の授業を参観し、それに質問して意見交換する中で、自らの葛藤を語り、先輩教師と互いの共感と肯定を交わし合うことが、介入の方法として試みられている。

後藤氏が、こうした介入研究において最も重視しているのが、学校教育の活動システムのレベルに内在する矛盾と個人レベルで日常的に経験されている葛藤との間のギャップに架橋し、両者をともに乗り越えていく解決策を生み出すことである。そのような解決策を、エンゲストロームは、「仲介的概念ツール」と呼んでいる。後藤氏は、この仲介的概念ツールこそが、初任教師が眼前で直面する危機的葛藤を主体的・自律的に切り抜けていくための「生きた道具」（p. 57）になるととらえ、彼や彼女がそれを自らの手で創造するような拡張的学習を支えることに介入研究の本質を見出しているのである。このことは、第6章において、初任教師のエージェンシー、すなわち行為における主体性の感覚や主体的な行為の能力を高め拡張していく支援とは何かを探ることへとつなげられ、学校現場で試みられた三つの介入研究の成果が、管理職の果たす重要な役割に焦点化しながら分析・検討されている。

さらに、第7章においては、本書が明らかにしてきた、初任教師にまずもって求められる育成課題に、養成期の大学生の段階から取り組んでいく

ためのインターンシップカリキュラムに関する介入研究の成果が考察されている。そこでは、「教授型教育実習から探究的学習活動への転換」(p. 194) によって、養成段階における大学生の学習・実習と初任・若手段階における教師としての仕事の間に見られる断絶を乗り越え、それらの間を接続することがめざされている。これこそ、ジョン・デューイが『経験と教育』の中でいう「経験の連続性」の追求といえるだろう。

以上、見てきたように、本書は、小学校初任教師の育成論にとどまらず、教師教育の全般的なパラダイムの転換に波及していく潜在力をもっているように思われる。本書は、教師の成長・発達とアイデンティティ形成の契機を、あらかじめ標準化されて課された特定の資質・能力の獲得ではなく、危機的葛藤の主体的で自律的で個性的な乗り越えにこそ見出していこうとしている。いいかえれば、それは、状況の中で意味を知り理解するだけでなく、それを超えて、意味そのものを生成・構築して創造する存在へと、教師の成長・発達の焦点を転換していく試みといえるのである。

本書の第9章「今後の課題と研究の展望」には、養成期の大学生から初任・若手教師の段階での育成システムを変えていこうとする後藤氏の熱意ある意欲的な構想と具体的な実践が提起されている。拡張的学習とは、まだそこにない何かを創り出すことだとするならば、危機的現状を乗り越え、教師を育てるシステムのオルタナティブを創造しようとする本書の取り組みこそが、拡張的学習そのものに貫かれたものであると考えられる。本書は、そのような拡張的学習を協働の道具とすることによって、来たるべき初任教師育成システムの萌芽を確かな輪郭と実質的な内容をもって果敢に提示したものであるといえるだろう。

(学術出版会刊　2014年10月発行　A判　248頁　本体価格4,200円)

大戸 安弘・八鍬 友広 著

『識字と学びの社会史
日本におけるリテラシーの諸相』

山梨　あや（慶應義塾大学）

本書は2001年に発足した識字研究会の共同研究、厳密に言えば1980年代、久木幸男によって提起された日本教育史研究における識字状況に関する研究課題への取り組みに端を発する、長期のしかも現在進行中の研究の成果を元に編まれている。研究会発足当初は識字率という「量的」側面の検討が主であったが、研究の進展と深化に伴い、識字の「質的」側面の検討も不可欠となり、「リテラシー」という概念を取り入れ、学びの内容にまで研究対象を拡大することとなった。このような研究の展開過程にも、「識字」という問題が地域(産業構造)、性差、階層、政治的・社会的状況、文化的状況など多様な要因と複雑に関連することを反映しているといえよう。

本書の特徴として第一に挙げられるのは、検討する時代と地域が長期、そして広範囲にわたることである。時代区分に則すると、古代、中世、近世、近代初期であり、検討する地域も北は会津から南は天草に至り、さらに農村、山間部、都市、都市近郊など地域的特徴も多様である。にもかかわらず本書が決して「個別の論文集」とならず、副題にもあるように「日本におけるリテラシーの諸相」を描出し得るのは、識字という状況をどのように捉え、その意味を追究するかという問題意識が各論者に共有されていること、さらに研究を進める上での方法論的吟味が徹底されていることにある。

第二の特徴として挙げられるのは、識字に関する個別具体的な事例を徹底的に検討する一方で、安易に「全体像」を推定したり、描出したりしようとしない、禁欲的な研究姿勢が貫徹していることである。これは各論者の研究姿勢が自己完結的であることを意味するものではなく、「識字」という問題系を研究することにより必然的に導き出されたものである。つまり、識字の意味するところは、それが必要とされる時代、地域、階層、社会的・政治的状況により一定しておらず、それゆえに「全体像」を想定することは不可能なのである。このような曖昧さを捨象して統一的な全体像を描こうとすることは、識字、リテラシーが有する本質的な問題を不問に付すということになりかねない。

もとより筆者は個別の研究成果について批判的検討を加えるほどの知見も持ちあわせていないので、各章から読み取ることのできる問題を横断的に検討していく。本書の構成は以下のとおりであ